

社会生活を営む上で、人間関係が円滑であることを誰もが望んでいます。円滑な人間関係は、関わりのある人たちとの「心のつながり（絆）」の強さが鍵となることも周知の事実です。しかし昨今の我国では、「心のつながり」の希薄化や分断化しつつある状況を危惧する声も少なくありません。

MDT日本会が行なった四十代～五十代を対象とした「夫婦の意識調査」で、駒沢女子大学教授・心理学者の富田たかし氏が、『シビアで現実的な妻、「賢母幻想」にすぎない夫』『将来設計』の共有が鍵』と題し、大略次のように考察を加えています。「愛は、たがいを見つめ合うことではなく、同じ行く手をとるに見えぬことにある」というサン・テグジュペリの言葉を引き、会話時間を増やし、夫婦で心のベクトルをそろえておくことが、将来設計のために大切であると強く指摘します。

先人は「偕老同穴（共によき年を重ね、同じ墓に入る）」「供白髪（互いに白髪になるまで仲良く）」といった夫婦を指し、死が二人を分かつまで共に過そうと将来設計を立て、そのもとで様々に努力してきました。それが最近では、こうした努力を厭い、夫婦間の心のつながりの希薄化・分断化が起こって、社会的な諸問題へと拡がっています。

社会を構成する最小単位であり、歳月を積み重ねて醸成した心のつながりを、子どもたちに教育する場が家庭です。しかし教育の中心者である親夫婦の関係が、戦後から変容してきています。「家庭内別居」「熟年離婚」「年金分割」などの言葉に象徴されるように、最近では夫婦の絆自体が希薄化・分断化してきているのです。



夫婦の絆を強め 心のつながり強化を

え・牧えみこ

その結果、切っても切れないほど強い絆で結ばれている親子関係にも変化が現われ、親子夫婦が互いに殺し合う悲惨な事件が増えています。これも、夫婦間における心のつながりの希薄化・分断化の現われといえるでしょう。心のつながりをどう創るかを家庭で体得したのち、これを応用する場が学校や職場ですが、その場にも「いじめ」「引きこもり」など、心のつながりの希薄化・分断化の波が押し寄せています。

倫理研究所の創設者・丸山敏雄は、夫婦の和合から健康も、繁栄も、幸福も、あらゆるものが生み出されると喝破し、家庭教育の根本は夫婦の心の関係にありと、その重要性を示唆しました。

また二代目理事長の丸山竹秋は、著書の中で「夫婦の間では、愛情を相手にそそぎこむときに、じぶんが生きているのである。夫は夫だけ、妻は妻だけの小我を主張し、それをおし通そうとすれば、それだけ夫婦としての結びつきや活動は破壊される。夫は妻の、妻は夫のギセイになるのではなく、おのれを捧げて、妻のため、夫のために燃ゆる愛のまごころを尽くすときに、じぶんの個性、天性が、はつらつとして躍動してくるのである」と提起しました。夫婦が互いに「相手ではなく、己を正す」ことによつて、心のつながりを強固に結ぶことができる関係が構築され、子どもたちに教育伝承して、もろもろの幸福を呼び込む礎となるということです。

まずは、夫婦の絆を強く結ぶことができよう自己革新を図り、社会に蔓延しつつある心のつながりの希薄化・分断化に夫婦レベルから歯止めをかけたいものです。